

# 槐

かい

岡井省二創刊

第150号記念特集号  
平成15年12月号

平成十五年十一月一日発行 第十三巻第十一号 通巻第一四九号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# グレートサムシング

高橋将夫

ひやひやと人が坐つてをりにけり

秋螢目が離せなくなりけり

織姫の胸の鼓動でありけり

秋冷の水をもやすといふことも

十六夜の携帯マナーモードとす  
歌好きの自然薯掘りでありにけり  
星月夜粉ふいてゐる吊し柿  
秋彼岸雲の中にて揺られをる  
何はともあれ蓮の実の飛んでから  
団栗の中のグレートサムシング  
胎蔵の銀河の外に銀河かな

# ミニミニアンソロジー

赤居好子

雲の峰茶山に人の気配なし  
葱坊主バスに乗る人降りる人

天野 きく江

貝塚にふはりと落ちし桐一葉  
黒犀や色無き風の匂ひける

雨村 敏子

白桃の包まれてある丸さかな  
空海の山へゆつくり花の風

市場 基巳

しやこえびを口にするさへ師が恋し  
百歳の彼方は鳩か菱食か

井上 都志子

シヤム猫の眼の水晶や神の留守  
虎河豚の眼の中の潮かな

石脇 みはる

白魚の汲みにごりせし流れかな  
枇杷熟るる日は西海に入りにつけり

井上 静子

土の上に裂けし石榴や烏骨鶏  
神農の虎かたかたと橋の上

石塚 光江

わが胸に鬼の霍乱芥子の花  
蟬しぐれ笑ふ布袋尊のお臍にも

岩下 芳子

方形に砂平らしをり鞠始  
望の潮声明高く低く和す

岩佐勝子

オカリナの響みし峽に春日かな  
しなやかに君想ひをり白式部

植木戴子

活断層動く三寒四温かな  
青空にドーナツの穴種袋

岩月優美子

穴まどひ木屑の匂ひありにけり  
すつぽりと木犀の香に空也かな

上野裕子

行く夏や高野の山の夜深し  
静けさを五体にまとひ四月尽

石住美千代

父の日に何がいかと子ら二人  
親子連れデイズニーランド浴衣着て

植松美根子

散る銀杏線路に勾配ありにけり  
初夏や池の向ふの洗濯屋

犬塚芳子

辛夷一本聖者とも見ゆ丘の上  
六道図なんじやもんじやの花の影

宇田喜美栄

蒼求火のくるくる角を曲り来る  
雪原の底の水音を聴いてをる

岩崎恵子

どこからか笑ひ声あり鬼は外  
日の匂ひ嗅ぎし真白な日傘かな

内迫敬子

花の闇般若の角を隠しけり  
天領の山ふところや雉子鳴ける

内田 裕夫

じんべい鮫の流し目を見る弥生かな  
酔海鼠やときを刻まぬ古時計

大竹 いそみ

山吹の一重口数少なかり  
赤土の匂ふ山なり松の芯

荻布 貢

アルプスの雄姿重なる枝桜  
湯気淡く香りたなびく土瓶蒸し

大島 翠木

三伏やしぼる魚卵のまくれなぬ  
耳たぶと首のほくろと豆の花

大滝 悦代

ポーナスの袋の中身翼かな  
気合入れ茅の輪くぐりの幼な子よ

金澤 明子

黒梁に桁ありにける夜の秋  
修道女春満月を背負ひをり

大山 里

肝の臓疲れて春の馬糞茸  
人は棒となる螢のふぶくとき

亀浜 ふみ子

蟬の声真紅の空に届けかし  
公園の親子の声と踊りかな

尾本 美恵子

ベビーカーを覗いて見ればビールなり  
子の声と重なる蟬の羽音かな

河 中 スエ子

金閣寺の池に小波赤とんぼ  
遠ちに見る穂草かくれにローカル線

勝田楠翁

都府樓の十法界に小鳥来る  
龍宮の省浄探す箱眼鏡

加藤 富美子

能の灯のとどく水面のあめんぼう  
見るでなく見てゐる冬のさるすべり

川股広実

大霜やシヨコラケーキとグラニュー糖  
バナナ二本短髪少女黒き顔

四井 由美子

人日や金平糖の角いくつ  
葉櫻や一弦琵琶の弾かれをる

梶巻典子

蓮根の穴九ツが靈かな  
風わたるみどりみどりの山田池

木下 野生

生身魂右とひだりを見てゐたり  
野を焼く火佛のまへを焼いてをり

河野恭子

手鏡を翳して見るや山粧ふ  
初雪の白さに勝るドレスかな

北嶋 美都里

夕立の過ぎ行くまでは広隆寺  
湿原に何見てをるや盆の月

加藤 みき

蟬落ちて土に描きし楕円形  
星雲や渦を巻きたる蝌蚪の腹

栗栖 恵通子

炎天やリングに眼ありにける  
まつ暗なところを通る秋の鯉

久保夢女

如月やときめきの色白となす  
ぶりんぼろぼあらばらふれ桜桃

小林登史子

薄絹を羽織る蕾の寒の入  
白蝶の越え行く先の朱雀門

黒田咲子

二日きてカイガラムシの真白さよ  
鶏頭花さはりなほしてをりにけり

近藤 きくえ

蓮見舟藻屑乾びてあたりけり  
角丸き積木ちらばり燕の子

久保 東海司

躰り入るとき笹鳴きをそびらにす  
祓はれて上眼使ひの七五三

近藤 喜子

秋声や濡れたる石の色かはる  
南無南無と蝗を囓んでをりにけり

近藤 紀子

骨壺を背たろふてをる海市かな  
下闇や夢の続きを歩みをる

佐藤 紘子

焼締の手ひねりの壺鱻の海  
鮎子の照りのよろしさ海明り

近藤 公子

はんざきのいさうな凹ありにけり  
縄ばしご降してをりぬ蟬の穴

坂本 ミヨノ

玄海の潮香ありける菜飯かな  
われは喜寿昭和も喜寿よ梅開く

島田美恵

鳥立ちしあと薄氷の流れゆく  
曲り道風立ちやすし紅葉狩

城尾 れい子

音消して春満月の出るところ  
啓ちつの山降りて来て麦の丈

庄司 久美子

布袋さまの笑ひいただく去年今年  
冬ぬくし椿象一匹とりこんで

鈴木 勢津子

はんざきの吐く息みどり山の音  
火の山の胎内くぐり水澄める

島田玉枝

針穴の向かうに夏の気配あり  
さくらんぼ何時も何処でも二人づれ

柴田靖子

釣瓶落しピエロの足の急にのび  
あきらかに白波たちて無月かな

島 すが子

囀やまるめて弾くしつけ糸  
濁り世へ雛の目隠し解きにけり

新谷 恵子

尺蠖の進む一分や飛行雲  
風遊ぶシャルウイダンス芋の露

鷺見 和子

吹奏楽真夏の闇を揺るがしぬ  
迎火を囲む子らあり大人びて

瀬川 公馨

海底うなそこの巨刺にゐたる鱗なり  
浜木綿や生木づくりの死出の門

十川 たかし

熟れやうと熟れやうと麦まだ青く  
銀の波引き寄せて冬の月

高橋 将夫

池を見て祭の中に入りにつけり  
毛衣も心も通り抜けしもの

高見 澄子

玉の汗真珠に変へて飾りたし  
星空や天までとどけ月見草

谷口 佳世子

蝸牛 G 線上のアリアかな  
十六夜の凱旋門をくぐりけり

谷村 幸子

池の周りけぶつてゐたり神迎へ  
白峯の夜風なりけり蝦蛄の鮎

瀧中 温子

唐梅は香を放つシャンデリア  
葉腋に雫を止む夏椿

醍醐 季世女

掌熊手に沙羅の紅葉を拾ひけり  
誰も来ぬ日にも机上に酔芙蓉

太中 幸子

手焙の炭たす夜や海の鳴る  
落慶の春中空の散華かな

竹中 一花

宵闇の白象の間に坐りをり  
ざらざらの櫻の幹のひこばえす

谷岡 尚美

梅の香やうしろに深き杜の闇  
長堤の春の闇へて橋渡る

竹内悦子

竹林のあはひにて十三夜かな  
大日の虚空となれり蚯蚓鳴く

寺田 すぐ江

黄蝶の堀を越へ行く密寺かな  
竹落葉埋め尽くして明るかり

竹井桂子

笑まふ子の寝返り近し初夏の風  
梅雨満月百日祝いの御膳かな

富松寛子

あふあふと聲する櫻ふり返る  
月光や土に交じりて貝の殻

田中和代

子育てや延命菊を束になし  
物干しに十葉の葉の揺れてをり

中島陽華

天竺のシートに蟻のすさびかな  
残る歯の一本も無し大花火

堤 美智恵

新米の手のひらにある光かな  
短日の竹鳴るところ腰おろす

中島 てい子

にんまりと尿る童や花畠  
鯽起し土鍋に耳のふたつあり

土本 展子

鯉幟 天領 日田の風はらみ  
草刈るや昨夜の集ひを遠くせる

永井 博光

潮騒を左右にしたり新松子  
竹細工編んで無口や蜷の道

中島 はるみ

京の秋虫籠格子の茶房かな  
ゆきあひの空に伸びゆく葦の花

中田 禎子

新涼やその静けさに象とゐる  
水中花ビー玉おはじき那智の石

西浜 晴美

草いきれ笛吹く子らは家路へと  
打水にそつと来て去る夕暮は

中道 愛子

桐咲いて川の向かうは日照かな  
大山を遥かに梨の袋掛

中 貞子

白梅の古木の洞の向かふ側  
雲ゆるく南瓜の棚に向かひ来る

中道 錦子

青大根中まで青し山の晴  
土雛の出雲の国の匂ひかな

中野 京子

右手左手風船ぬけてゆきにけり  
海の字の中の母の字遠花火

新居田 文子

四国路のダム満ちてをり女梅雨  
竹落葉ひかりし方へ母の笑み

西村 純

掌中に胡桃がありて摩利支天  
虚仮の世は虚仮の形にて雪化粧

延 広 禎 一

どの星に棲まうか秋の鳩  
秋扇置きて高野に遊戯しをる

橋本順子

橙をしぼるや五感動き出す  
寒の雨蕾の先で玉となる

福西政子

昼寝して夢に山河のはるかなり  
小春日の花柄杖とひ孫かな

橋本正二

空蟬をマニキュアの爪はじきける  
愛染や浴衣のをんな大柄よ

福本陽子

落葉して木々の命の膨らみぬ  
湖西にも日の蘇る座禅草

美藤智恵子

柩あり矢車草の青き色  
枇杷の花まばたきしたる駱駝の目

本多俊子

鯨ひげ凧の呻うなりとなりうなりにけり  
犀がゐて五月の空を広げたり

平井志都子

雪になるといふ蒟蒻の刺身かな  
わたなかに月の道ある麻暖簾

松本桂子

巻貝のふちのくれなゐ十三夜  
囀や古墳の穴に水たまる

藤山星河

栄転も左遷も昔ちやんちやんこ  
忘却も生きるすべなり小春風

松原伸子

トランペット急に鳴り出すジキタリス  
蟬生る山に狼煙の立ちにけり

松下 八重美

岩桔梗安房峠にかかると  
剥落の大絵馬のあり一位の実

がらあきの異なりけり羽抜鶏  
十葉や写楽の鼻の伸びにける

南 一雄

前田 美恵子

六道の檜のほひの身のほとり  
小春日の黒谷和紙の滲みかな

晴れた日の遠き山裾花の雲  
大寺や屋根に届きし朴の花

宮武 フミ子

丸山 分水

つまみ塩ほどの月山田拵へ  
一遍の佐久や一位に実のあまた

さねかずら置かれし夜の昼かな  
貝のひも噛みぬて亀の鳴けるなり

水野 恒彦

的場 清子

観覧車の頂きに来て花の雲  
はり替へし障子の部屋に水音かな

櫛もみぢ要となりて山彩る  
指の骨鳴らしてメール寒明ける

村井 ひさ女

万城 希代子

聖天の和合や穂の芽の固し  
こね鉢の縁のぶ厚さ寒明くる

満洲と云ひし時あり迎春花  
母かとも鏡の中の夏衣

村井 武子

森岡芳樹

小春日や故郷いつもここにあり  
交番に届いてゐたる除夜の鐘

安岡房子

コンテナの横一列に麦の秋  
枇杷熟れて昭和熔岩横たはる

森岡明子

サロマー〇〇キロ蝦夷透かし百合見るために  
新春の箱根路つなぐ襷かな

唯野まり

日脚のぶ大日さんの大欠伸  
ふんころがしのころがつてをる手毬かな

吉田真弓

水しぶき今年も夏がやつて来た  
雨あがり紫陽花の露キラキラ

吉原敏子

春慶の椀にもりたる露の臺  
せせらぎやひばりの声は空の色

山田貞代

嬰兒の笑ひえくぼや花の宴  
湧き水に鳥の水浴び花の昼

吉田順子

天日に秋扇影を作りけり  
甕に水汲みてをるなり無月かな

山本晃一

櫻湯に櫻餅ニツ祇園茶屋  
花蕊まで散らす祇園の宵櫻

渡辺ひろし

新玉葱畝白々と午後は晴  
山雀の声よくとほる宮の杜

# 權立てかける

水野恒彦

秋の虹水にいろをく汀かな  
新絹や湖の面テの揺れてをり  
潮先にとびつく蒲の穂絮かな  
槍鶏頭光る沖から何も来ず  
秋天に濡れたる權を立てかける  
鳥渡るころや人には故山あり  
灰すこし捨てられてあり曼珠沙華  
あら草に胸すりゆけり穴惑  
野分だつ泉の底の明るかり  
水抜いてある溜池の無月かな

特別作品

硯あり海より鬱金の月上る  
はじめから烟つてをりし尾花蛸  
银杏散るながき白昼鏡の間  
冬虹やアトリエにあるデスマスク  
大甕を磨きをりしが敗荷  
冬薔薇白は紛れず争はず  
綿虫に晩節のいろ見たるのみ  
冬至粥なほ西方に月はあり  
磁場ありて凍蝶そこを動かざる  
銅鏡の寒のひかりをあつめぬし

# 槐集

## 高橋将夫選

大皿を銀河の端に洗ひけり 岡崎

本多 俊子

空の奥まで濡れてゐる雁来紅

蟬のこゑに波動ありけり阿波縮羅 枚方

雨村 敏子

ゴツホゐてカンナの黄いろ<sup>あまね</sup>洽しや

無花果の繁みでこゑす水の際

六根や良夜の海のふつくらと

赤き星の巽にありし秋の潮

三宝にまずは荔枝を置きにけり

笑い茸かもしれぬ猫戻りくる

大の字に二百十日の亀の浮く 香川

黒田 咲子

火の星の中に水音や鱒はねし

産寧坂照らす火星や夢二の忌 京都

秋彼岸何の鳥より鶉は淋し

ロシアこけし早生蜜柑など召し上れ

破れしはもの云ふごとし青芭蕉

省二忌の鶉の瀬に足を浸けてをり

白襷掛けて秋嶺に入りにつけり

日の中の鴟尾と黄檗<sup>きはだ</sup>や省二の忌

青くるみ草魚の池で洗ひをる

実石榴や格子戸越の毘沙門天

送火や覆面の鬼のきてをる 奈良

瀬川 公馨

わだつみの澄みを語れり月の客 枚方

谷村 幸子

海牛の婀娜を放てり葉月潮

萩咲いて人登りくる閻魔堂

浮き雲や緑蔭に入りて帰らず

照り合うて秋夕焼の空と海

店頭にお初でござる辨慶草

人つどひ爽やか九体阿弥陀堂

魂のここにはあらず秋櫻

湧水のそばに來てをり龍田姫

# 銀河往來 高橋将夫

## 『槐』創刊百五十号と『岡井省二全句集』

▽この十二月号で「槐」は創刊百五十号に到達した。振り返ってみると、創刊百号を祝ったのが平成十一年十月号で、あれからもう四年余りが経過した。

十一月二十三日、香川で開催された「槐」全国大会は、十二年記念大会、かつ故岡井省二先生三回忌追悼大会であると同時に、創刊百五十号記念の大会でもあった。

本号では各自二句自選のアンソロジーが特集されている。

二句に絞り込むのに悩んだ末、最後は自分の好きな句を選ぶことになったのだと思う。ともかく、「槐」百五十号の歴史の集大成でもある。改めてじっくり鑑賞してみたい。

▽『岡井省二全句集』が完成した。「槐」全国大会までにと作業を進めてきたが、なんとか間にあった。発行日は十一月二十六日：故省二先生の誕生日である。

省二先生は十一巻の句集の他、『俳句の波動』など膨大な業績を残された。当初、これらを集大成した『岡井省二全句集』なるもの考えたが、諸般の事情から断念した。改めて、師の業績の大きさを痛感させられた。そこで、せめて師の作品、句集十一巻だけはまとめておきたいということから、今回の『岡井省二全句集』が企画された。師の句集の「あとがき」と「口上」を収めた「解題」と簡単な年譜が付されているので、作品鑑賞の参考にしてもらえたら幸いと思う。

大皿を銀河の端に洗ひけり 本多 俊子  
なんとも雄大。宇宙を我がものとしている。「遊戯の器」もこれくらいスケールでありたい。

秋彼岸何の鳥より鶉は淋し 黒田 咲子  
華やかな鶉飼の舞台が過ぎた鶉だからこそ淋しいと言えば理屈。直覚として淋しいであろう。

海牛の婀娜を放てり葉月潮 瀬川 公馨  
確かに海牛の色はさまざまで美しい。しかし、アダな姿とはおそれいる。葉月潮でしつとりと収まった。

笑い茸かもしれぬ猫戻りくる 雨村 敏子  
やはり笑い茸なんでしょうね。猫が戻って来たということは。真面目な顔でとぼけるところがおもしろい。

ロシアこけし早生蜜柑など召し上れ 竹中 一花  
ロシアこけしと早生蜜柑のかもしれませんが雰囲気に、「召し上れ」が追い討ちをかけた感じ。余裕の一句。

わだつみの澄みを語れり月の客 谷村 幸子  
癒しの一句。実際に美しい海について語りあったのであろうが、まさに精神の風景。

声明のこゑに波あり小鳥くる 近藤きくえ  
黄檗山で聞いた声明は、まるで男性合唱団の合唱であった。声明を聞きながら小鳥に目がいく精神の位相に共鳴する。